



Title	カール・バルト研究 : 絶対的逆説の神学 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	宇都宮, 輝夫
Citation	北海道大学. 博士(文学) 乙第7126号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/81468">http://hdl.handle.net/2115/81468</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Teruo_Utsunomiya_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

# 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名：宇都宮輝夫

審査委員 主査 教授 佐々木 啓  
副査 准教授 宮嶋 俊一  
副査 教授 長谷川貴彦  
副査 寺園 喜基（九州大学名誉教授・福岡女学院大学院長）

## 学位論文題名

カール・バルト研究 ―絶対的逆説の神学―

### ・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は、一次資料たるカール・バルトの諸著作を丹念に読み、相互につき合わせ、思想全体の論理連関を明らかにしながら理解困難な箇所を極力埋め、全体を統合的に理解しようとする、神学思想の歴史学的研究である。以下では本論文の内容に解説を加えつつ、そこで達成された研究の諸成果を挙げる。

第1章は、バルトの聖書解釈学方法論の内実とその射程を明らかにしようとしている。バルト自身が説明する解釈学では、一方では歴史的批判的方法の不可欠性が表明されつつも、他方では靈感説はそれ以上の重要性をもつという論理矛盾と思われる発言がなされていたため、彼の解釈学方法論は永らく論理整合的に解釈されることがなかった。本論文はこうした論理矛盾に見える言説の根拠を探っている。まず本論文が着眼したのは、バルトが議論の背後で念頭に置いている論敵であり、それは宗教改革者ルターが論敵としたのと同じ者であって、一方ではカトリシズムであり、他方では熱狂主義である。前者は聖書を天的啓示の地上的結晶物と見なし、後者は聖書を無視して神からの直接的啓示を受けると主張するが、どちらも神認識の直接的伝達を主張する。これに対してバルトが固守しようとしたのは、神認識の内容は聖書の一般的解釈を通して認識されるが、その真理性の受容は啓示を通して実現されるという立場であった。聖書の真の解釈は、人間の言葉の解釈と、啓示による真理受容という絶対的異質の一致という逆説においてのみ生ずるというのである。バルトのこうした聖書論は、真の神にして真の人間というキリスト論の逆説性とその根底になっていることが明らかにされている。

第2章は、半世紀に及ぶバルト神学の展開の中に思想的な変化を見る転換論を否定し、むしろ逆説の神学という基本特性が終始一貫していることを実証している。転換論とは、バルトが神と人との断絶を強調する弁証法神学から両者に連続性を見る類比論的神学へと転換したという見方である。これに対して本論文で宇都宮氏は、弁証法とは内在が内在のままで超越に参与するという逆説的な人間の存在状況であること、さらに類比もまた、人間と超越との間の類比は現在の所与ではなく、将来の約束にすぎないということがバルトの思想である、と指摘している。したがって、地上の現実が同時に将来の超越であるという逆説的事態を指し示すのがバルトにおける類比なのだ、ということが見極められている。

第3章では、近代神学に関するバルトの見方が論じられている。第1章、第2章とは違う角度からではあるが、逆説の解消を企てる近代神学を、バルトは逆説に固執する立場から批判している、ということが指摘されている。

こうして本論文は、第1章では聖書解釈学を切り口として、第2章ではバルト神学の連続性問題を切り口として、「絶対的異質の自己同一という」キリスト論こそバルト神学の基底にあり、かつ帰結であるという結論、つまりバルト神学が絶対的逆説を固持し、そこから出発し、それを目標として指し示す神学であるという結論を引き出している。

本論文はバルトの膨大な文献を丹念に読み解き、さらに駆使しながら、バルト神学の一貫した特質を説得的に論証している。しかも切り口とされた諸問題も、これまで未解決の問題であり、それらに十分な解明の光を当てたと評価することができる。

他方、本論文には審査過程でいくつかの疑問と要望も寄せられた。

まず内容上の問題であるが、キリスト教の全教理が逆説としてのキリスト論から発し、それを指し示す形でキリスト論の言い換えにほかならないとしても、バルト神学ではそのキリスト論が現実には予定論、創造論、契約論、和解論、終末論といった具体的な展開を見せているのであり、そうした思想（物語）の豊かさが本論文では描ききれていない。次に論述の構成に関してであるが、本論文の狙いと帰結の一貫性は全体の読了後に理解できるものの、最初に全体の問題が明確に分節されていないために、論旨の展開が読み取り辛い。各章ごとの結論は記述されているが、最後にそれらをまとめた結論が再説されていたならば、全体的な結論もさらに容易に見て取れたはずであろうと思われる。こうした要望と意見があったものの、本論文は未解決であった諸問題をも説得的に解決しつつ、バルト神学全体の構造と特質を正確に別出しており、学術的価値は高いと評価できる。

#### ・学位授与に関する委員会の所見

以上の審査結果から、本審査委員会は全員一致で本学位申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると判断した。